

研究通信

No.68

1969.12月刊
村落社会研究会
事務局
東京学芸大学
社会学研究室内

第一七回大会からの報告

柿崎京一

第一七回村研大会はさる十月一日、二日の両日、丹波篠山で盛会裡におこなわれました。大会の印象を当日参加された方々のために柿崎氏にまとめていただきました。

大学法の強行採決―施行という非常事態に直面し、各大学とも緊迫した局面に進展しつつあったため、一時は大会の開催も危ぶまれる客観情勢であった。とりわけ、事務局の関西学院大学は長期にわたり全共闘学生による全学封鎖の中で大会準備を進めていかなければならないという最悪の状況下にあった。こうした困難な事態をのりこえて、予定通り大会開催を実現しえたことの意義は大きい。

大会の共同課題は当初「村落社会研究の方法」ということであったが、大会前の研究会も殆んど行われず、また課題報告を積極的の希望する会員も居らぬままに、結果的には大会運営の一切を事務局に委任するということになり、万事、余田・光吉両委員の御努力によって大会のスケジュールがかたまるという裏舞台に支えられて開催の運びにいたったことを、この機会にまずもって明記しなければならぬと共に、感謝の意を表わしたい。

本年の大会は、以上のような背景のもとに開催されたのであるが、大会報告者はもとより、大会参加者の数も例年に劣らず、しかも充実した大会内容であった。とくに、本年度大会では、(1)大学院生をはじめ、若い方々の新入会員の参加が目立ったこと。(2)大会開催地である丹波篠山にちなんで「近畿北部農山村」の特集を行ったこと、の二点においてきわめて印象的な大会であったように思う。

大会第一日目の午前自由報告では、いずれも現代農村を対象とした、新進気鋭の研究者によって多くの問題が提出された。とくに、その際、農民生活が多様に分化し、生活領域の拡大しつつある現代農村を、どのような視点から、どのような方法で切り込んでいったらよいか、といった疑問があらためて考えさせられた。

第一日目の午後の報告は、「近畿」特集であった。報告者は、どなたも長年にわたって近畿をいし中国農山村の実証研究をすすめて来られている方々であり、しかも社会学(松本・米村)・経済史学(岡)・民俗学(竹田)という、まさに「村研」の本領を発揮した、各学問分野からの村落研究の報告であった。報告の内容は、年報第六集に掲載予定なので、ここでその内容及ぶことは割愛したいが、第二日目の午後に予定されている共同討議のテーマ「村落社会の変動」の展開に、大きな関心を引きつける内容のものであった。

第二日目の午前中は自由報告二題と、前日の特集報告に予定していた竹田聴州会員(本大会を機会に入会)の報告がなされた。自由報告を予定しておられた内藤会員は、大学紛争のため出席できず、テープに吹き込んで録音報告に代えるという御苦心を払われた。会

員相互の心安さから、とかく大会参加申込などイージーになりがちな傾向に対して反省させられる一事であった。また、米村・竹田両会員のスライド併用による発表は、報告内容の理解に大変役立つことも併記しておきたい。

第二日目の午後は、事務局の提案された共同討議のテーマ、「村落社会の変動」に即して、近畿北部村落の中世から近世・近代への変動、および自由報告で出された現代村落社会の変動の報告を中心に討論の展開を企てた。その際、各報告の中で共通してみられた一つの問題は、身分・階級といった階層の問題であり、討議の焦点を、この階層問題にあわせ、村落の階層性を変動分析の視点にすえて討議が行われた。

討議の内容については、いずれ司会者団の代表によって取りまとめることになっているので省くが、「村落研究の方法論」が、実証研究に即して討議され、それぞれに強い問題関心をいだかせたことは大きな収穫であったように思う。

共同討議の終了後、事務局のはからいで、丹波焼のカマ元見学の機会をえた。夕色迫る丹波の山なみを眺めながら、篠山藩五万石の歴史をふりかえり、伝統芸術をまのあたりたみて、しばし時のたつのを忘れた。第一日目の夜、懇親会の席で頂戴した丹波焼の「グイ飲み」と共に、丹波篠山大会は、永く忘れぬ思い出となることだろう。

本年度の大会は、このような、いろんな意味で村研にとって意義の深い大会だったように思う。それだけに、事務局を担当された、余田・光吉両委員および関西学院大学の学生の方々のなみなみならぬ御努力のたまものと厚く感謝しなければならぬ。